

欺瞞だった宣言

この二度にわたるカラハン宣言は「糖衣をまとった毒薬」でしかなかった。例へば、第一次カラハン宣言の云ふ「東支鉄道の無償返還」は第二次宣言では早くも引込められ、「ソ連の必要を尊重して特別条約を結ぶ」と書きかへられてしまつてゐたのである。宣言の最も重要なポイントである領土問題を見るに、帝政ロシアがかつて愛瑣条約（一八五八年）、北京条約（一八六〇年）で武力を背景に支那から奪取した広大なアムール地方と沿海州を、ソ連は今日に至るまで一平方センチも返還してゐない。

また東支鉄道に至つては、一九三五年（昭和十年）、ソ連はこれを満洲国に譲渡した。その後、第二次大戦末期、ヤルタの秘密協定に於て、「東清（＝東支）鉄道及び大連に出口を提供する南満洲鉄道は、中ソ合弁会社を設立して共同に運営する。但し、ソヴィエト連邦の優先的利益は保障し」云々として、東支鉄道のみならず南満洲鉄道についてまで再び特権を要求した。因に、ヤルタ密約の中でソ連は、海軍基地としての旅順口の租借権の回復も要求したのである。もし連合国の対日戦争が、支那の主権を守るための正義の戦ひであつたとするならば、支那に於けるソ連の特権と領土租借権の回復を約したヤルタの密約は、その戦争の意味と正当性をゼロにしたと云つてよいだらう。否、そもそも、対日戦争が、はじめから明確な国際正義に立脚した戦ひではなかつたが故に、上の如き競争目的の転倒と矛盾が終局に於て露呈したと云ふべきかもしれない。

ともかく、カラハン宣言は、友好のゼスチュアによつて支那の対露不信を取り除き、やがて全支那を赤化するための欺瞞にみちた手口でしかなかつた。支那の一部指導者、深き思慮を欠いた知識人と学生達がこれを盲信歓迎し、急速にソ連に傾倒し、やがて自分の国の共産化を許してゆく様は、その後の支那と極東の歴史を知る者の胸に、限りもなく深い悲哀の感を催さずには居ないのである。

ソ連の支那共産化工作は着々と進み、一九二二年七月、上海フランス租界に於て中国共産党の成立大会である第一次全国代表大会が開かれた。出席者は七地区代表十三名であつた。尤も当時の黨員は全部で三十余人、一説では六十余人にすぎず、「代表大会」とはいへ、支那国民からは全く疎外された少数グループの密会に過ぎなかつた。代表には李達（上海）、陳公博（広東）、董必武（武漢）、毛沢東（湖南）、周仏海（在日本代表）などが名を連ね、張國燾（北京）が大会主席であつた。コミンテルン代表としてマーリンとポイチンスキーが出席、意の儘に大会を「指導」した。かくして中国共産党（中共）が成立、第三インターナショナルに加盟した。

第二節 第一次国共合作

赤露、孫文へ接近す

その年の十二月、コミンテルンはアジア問題専門家であるオランダ人マーリンをして孫文と接触せしめた。マーリンは孫文の共産主義に対する警戒心を宥和せんとして、ソ連の新経済政策NEPを例にあげて「ソ連は別に共産主義を實行してをらず、新しい経済政策をとることに改めた」と語つてソ連の政策の柔軟性を力説した。孫文はマーリンの言葉をその儘信じ、ソ連の新経済政策に大きな興味を寄せた。新経済政策が、彼の民生主義に著しく接近してゐるとの印象と安心感を孫文に与へたことは、その結果から見ても、極めて重大なことであつた。

孫文とマーリン或いは共産主義者との間の決定的な世界観の相違を示す話が残つてゐる。マーリンが「あなたは何のために革命を行なふのですか」と尋ねると、孫文が「人を愛するが故に革命をするの

である」と答へた。この答へはマーリンを戸惑はせた。マーリンは孫文との会谈後、張継に対して「人類のために革命をするといふのでは、革命は永遠に成功することはできない。我々は人を恨むが故に革命を行なふのだ」と云つたといふ。

孫文の三民主義と共産主義の目ざすものは、その出発点に於て、すでに天地の差があつたわけである。それにも拘らず、孫文は連ソ容共、即ち共産主義を許容する方向へ傾斜して行つた。

一九二三年一月二十六日、有名な「孫文・ヨッフエ宣言」が発表された。ヨッフエはソ連外交官である。宣言は四項目から成り、要旨は以下の通りである。

(一) 孫文は、共産組織並びにソヴィエト制度は事実上、支那に於ては採用不可能である、その理由は支那にはこの様な共産党とソヴィエト制度が成功し得るやうな情勢がないからであると云つた。この孫文の見解にヨッフエも完全に同意した。更に孫文は、支那の最大緊急問題は、国民的統一の完成と完全な国家的独立の獲得にあると説明した。この大事業達成のため、ヨッフエは孫文に対して、支那はソ連国民の熱誠な同情と援助に信頼してもよいと勧告した。

(二) 一九二〇年九月二十七日のカラハン宣言の依然有効であること。ソ連は帝制ロシアが結んだ露支条約(東支鉄道の締約を含む)を喜んで放棄する意思のあること。

(三) 東支鉄道は当面、現状維持する他ないこと。

(四) ヨッフエは孫文に対し、ソ連現政府は決して外蒙古に於て帝国主義的政策もしくは支那と分立する如き工作を実施する意思と目的を持たないと宣言した。

孫文・ヨッフエ会谈で、孫文の国民革命路線との接触到成功したソ連は、結党三年目の中共に対して国民党との合作を働きかけた。この結果、その年六月に開かれた中共三大会に於て「国民党が国民革命の中心勢力である」ことを採択し、国共合作路線を打出した。中共が、その本来の使命である支那の共産化を胸中深く秘めて、共産主

義者の云ふブルジョア民主主義革命を目標とする国民党との合作に踏切つたのは、中共の自発的意思に基づくものにあらずして、全くコミンテルンの「戦術に基づく命令」によるものであつたと云はれる(大久保泰「中国共産党史」上)。

孫文の共産主義案観論

一九二三年八月、蔣介石は孫文の命を受け、ソ連代表マーリンと会見、「孫逸仙博士代表团」を組織してソ連を訪問、その軍事、政治並びに党務を視察して十二月に帰国した。この訪ソによつて、蔣介石がソ連や共産主義について得た印象と結論は次の如きものであつた。

(一) コミンテルンの革命の友に対する策略は、かへつて革命の敵に対する策略よりも多い。

(二) ソヴィエトの政治組織は専制かつ恐怖的なものであり、国民党の三民主義政治制度とは到底相容れない。

(三) ソ連共産党や政府の責任者は外蒙侵略の野心を絶対に放棄してゐない。

(四) 訪ソ三カ月間に受けた印象を一言にして云へば、それはソ連の共産政権が一たび強固な存在になつた暁には、ツァー時代の政治的野心の復活する可能性があり、従つてそれが将来、我国と我が国民革命に与へる禍は、測り知れないものがあらうといふことであつた。

(五) ソ連共産党の対華政策は、先づ満蒙や新疆、チベットをその「ソヴィエト」の一つとすることであり、中国本部についても侵略の意図がないとは云へない。

(六) ソ連のインターナショナルリズムとか世界革命とかも、その実はツァーの帝国主義と何ら変わらず、ただ名義を変へて世人を惑はさうとするものである。

(七) 私は訪ソに先立ち、ソ連共産党の中国国民党に対する援助は我々を平等に取扱ふ真心から出たもので、絶

対に私心や悪意をさしはさまぬものだを確信してゐた。しかし、ソ連を視察した結果、私の理想と信念は霧のやうに消え去つて、わが党の連ソ容共策は、一時的には西洋の植民地政策に対抗できるが、決して国家の独立自由を達成し得るものではないとの結論に達した。またソ連の「世界革命」の策略や目的は、東洋の民族独立運動にとつて、むしろ西洋の植民地政策よりも一層危険なものであると感じた。

ソ連と共産党についての蔣の得た結論は斯くの如きものであつた。しかし、蔣の報告を聴いた孫文は、中ソ両国の将来についての蔣の見解は取越し苦勞に過ぎて革命の現実にそぐはないと述べ、「中共を国民党の指導下におくことによつて、彼らが階級闘争で国民革命を妨害するのを防止することができる。北伐が成功すれば、共産党が国民党を破壊しようとしても不可能になる。しかも、ソ連は国民党を中国革命を指導する唯一の政党として認め、また共産黨員に国民党に加入してその指導に服するやう勧告してゐる。またソ連は中国で共産主義を實行する可能性のないことを認めてゐるではないか」と主張して、連ソ容共の既定方針を変更しようとはしなかつたのである。共産主義に対する孫文のこの恐るべき樂觀主義を見れば、共産主義による支那指導部の洗脳工作が、いかに短期間に進捗し、着実な成果を挙げつたかを看取できよう。

国民党が容共を決定すると、共産黨員は統々と国民党に「混入」しはじめた。混入の方法は様々で、紹介によるもの、相互に引入れたもの、自薦、集団加入などであつたが、中には長期間、身分を隠して潜伏してゐた者も居た。いづれにせよ、当時の共産黨員の殆どすべてが混入してきたのである。

ソ連の指導で国民党改組

この年、一九二三年十月に極めて重要な役割をもつた人物がソ連共産党から支那に派遣された。ボロヂンである。彼は孫文を訪ね、国民党の重大欠陥として、組織の不完全と規律のないこと、更に大衆組織形態を採るための

民衆的基礎を欠いてゐること等を指摘し、国民党が有力な革命的武器となるには、これら諸点を改変せねばならぬと説いた。

支那に於ては、まだ共産主義を論ずべき状態にないとか、共産党と国民党の究極目的が一致するとか、共産党は国民党の指導に服すべきだとかのボロヂンの巧言は完全に孫文の心を捉へた。孫文はボロヂンの意見に全く同意し、直ちに彼を顧問にしたのであつた。この間、既述の如く、中共の有力者が統々と国民党に加入、かくて孫文はソ連及び中共の革命戦術を採用して国民革命を進める決心をした。そしてその前提として国民党の改組が行なはれたのである。改組の前夜、孫文は国民党員に「もし我々が革命の成功を欲するならば、我々はロシアの方法と組織と訓練とを学ばねばならぬ」と教へ、併せてボロヂンの意見に忠実に服従せんことを希望した。

十月下旬、孫文は広東に臨時中央執行委員会を組織し、宣言、党綱などの起草を始めると共に、ボロヂンを最高顧問として国民党の改組に着手した。

かくして歴史的な国民党第一次全国代表大会が、一九二四年一月二十日から三十日まで広東で開かれた。この大会が決議せる重要事項は次の通り。

(一) 国民党の改組 新らしい党組織は、ボロヂンの顧問団の完全な指導と影響の下に作り上げられたもので、ソ連共産党の組織を殆どそのままの形で模倣したものであつた。党全体を一個の統一ある強力な戦闘単位たらしめるためにピラミッド型の中央集権制を採り、委員会制度を採用した。因に国民党改組について孫文は、辛亥革命が成果を挙げないのは革命の方法が間違つてゐたからであり、六年あとのロシア革命が成功したのは方法が良好だつたためである、と述べてソ連共産党を範とする立場を公表した。

(二) 連ソ容共(国共合作) 連ソ容共に関しては、当初から国民党内の意見が左右に分裂してゐた。馮自由、謝英伯等を中心とする右派は「共産党に廂を貸して母屋を取られる」ことに不安を感じて共産党の国民党入党に強く反対したが、孫文はこれらの反対者を押へて共産党と合作したのである。良識ある者なら、共産党に対し

て当然抱くこの不安と懷疑について、孫文はこの一大大会の演説の中で次の如く宥和、説得せんとした。

「我党がすでに遵奉してゐる民生主義は、いはゆる社会主義、共産主義及集産主義をことごとくその中に包括してゐるのである（民生主義は社会主義を包括し、共産主義は社会主義の一部であるが故に、共産主義は民生主義に含まれる）。……露国の今日実行してゐる政策の如きは実は純粹の共産主義ではなく、民生問題を解決するための政策に過ぎないのである。我党の同志諸君は、ここに於て共産主義と民生主義とは毫も衝突するものでなく、範圍に大小あるのみであることを了解されるであらう」（外務省調査部訳「孫文全集」）。

民生主義は社会主義に等しく、従つて共産主義をも包括すると云ふこの孫文の議論は誤謬であるのみならず、甚しく軽卒無責任なものであつた。

何故ならば、国民党一大大会の開かれたと同じ一九二四年八月、孫文は黄埔軍官学校で初めて統一的にマルクス主義を批判し、マルクス主義に対する三民主義の立場を明らかにしたのである。彼は唯物史観に対して民生史観を提出し、階級闘争を鋭く排撃して階級調和主義を主張し、剰余価値論の誤謬を指摘する一方、事実によつて資本主義の不消滅を証明し、フォード自動車工場の生産組織を理想的なものとして賞讃した。結論としては彼は「マルクスの学問は崇拜するが、マルクスの方法を中国に実行することはできぬ」としたのである。孫文の三民主義の思想には私有財産制度を否定する要素は少しも含まれてゐないのである。後年の南京政府による「中華民国憲法草案」は忠実に三民主義に沿つて作成されたものだが、それはワイマール憲法以上のものでは決してないのであり（高橋勇治「孫文」、三民主義と共産主義との本質的懸隔と矛盾は、掩ふべくもなく明らかなのである）。

国共合作が国民党の勢力を利用し、国民党を徐々に赤化し、遂には支那革命のヘゲモニーを掌握し、全支那を赤化せんと企む第三インター及び中共の野望を実現する戦術の第一歩でしかなかつたことは、その後の国共合作の歴史が立証してゐるのであるが——そして国民党員の中にはその疑念と警戒心を抱き、合作に反対あるいは明確な入党条件を要求した先見の明ある人々も居たのであるが——遺憾ながら、孫文には、この共産主義者の遠大なる陰謀

を見抜くことができなかつたのであつた。

かくて共産黨員は個人の資格で続々入党し、国民党の要職についた。即ち定員二十四人の中央執行委員の中には李大釗、譚平山ら三人、定員十七名の候補の中には林祖涵、毛沢東ら七人が選出された。また、李大釗は北京政治分会主任、林祖涵は党農民部長、譚平山は党組織部長の要職についた他、国民党中枢機関に多数の共産黨員が入込み、一大勢力を形成したのである。斯くして国民党の中に共産党が公然と同居したのである。国民党はもはや国民党ではあり得ず、国民革命はもはや漸進的穩健なる改革に留まることはできなかつた。以後、国民党と国民革命は、内部に巣くふ赤魔に奔弄され、否応なく狂暴過激なる路線を突進することになるのである。

(三) 黄埔軍官学校設立 国民党一大大会に於ける第三番目の重要決議は、国民革命軍の幹部を養成するための黄埔（広東省）軍官学校設立であつた。第三インターの財政的支援とボロチンの指導の下に準備されたのである。軍事教育のため、ソ連からガロン（本名ブリュッヘル）以下多数の将校が派遣された。特に注意すべきは軍人の政治教育であり、党代表が参加し、政治部が設置された。六月に開校式が行はれ、校長は蔣介石であつたが、教授部副主任に葉劍英、政治部副主任に周恩来など、早くも共産分子が混入したのであつた。

(四) 大会宣言 大会は最後に党の綱領を決定し、国民党第一次全国大会宣言を中外に発表してその歴史的な幕を閉じた。この宣言は①中国の現状 ②国民党の主義 ③国民党の政綱の三段より成つてゐた。このうち国民党の主義については、民族・民権・民生の三民主義に従ふとされた。その中の民族主義は、「中国民族自救解放」即ち中国民族の独立と、「国内各民族一律平等」即ち、清朝の版図に含まれてゐた边境諸民族をいかに遇するか二つの問題を含んでゐた。後者の边境諸民族問題については「国民党は国内諸民族に対し鄭重に次の如く宣言する。国内各民族の自決権を承認し、反帝国主義、反軍閥革命に勝利を獲得せる後、自由にして統一的なる（各民族の自由なる連合より成る）中華民国を組織するであらう」と宣言されたのであつたが、国内諸民族の平等と自決権の約束は、しかしながら決して実行されたとは云へない。新疆やチベットの諸民族の自決

権や独立は今日に至るも中国は認めようとせず、そのためこれらの辺境地方で流血の独立運動が起きてゐるのである。また満洲については、清朝を倒した後、支那は満洲まで自国の領土とみなしたのであり、後年の満洲事変に於ては満洲民族の独立と自決権を明確に否認して、満洲民族の独立を主張する日本と対立したのであつた。今日、満洲は「中国東北部」の名称の下に抹殺され、勿論、満洲民族の名称も消されてしまつた儘である。国民党の政綱の中で注目すべき項目としては対外政策として「一切の不平等条約、例へば外人の租借地、領事裁判権、外人の関税管理権及び外人が中国領土内に於て一切の政治的権力を行使して中国の主権を侵略する如きは皆これを取消し、相互に主権を尊重する条約を改めて締結する」とうたひ、不平等条約の一方的廃棄を宣言した点で、これは後日「革命外交」として展開されることになる。

以上の宣言案もボロチンの起草に成るもので、ここに現はれた三民主義は第三インター乃至中共の革命理論と孫文の革命理論との最大公約数であると云はれてゐる。

第三節 中共の陰謀と国共対立

共産党早くも策動

国共合作で国民党に加入した共産党員は、忽ちその正体を現はし、国民党を分裂破壊せしめる陰謀を企てた。共産党は週刊機関紙「嚮導」や書籍・雑誌によつてマルクス主義を宣伝し、浸透工作を進め、次いで切崩しのため国民党内部で「左派」「右派」「中間派」などの名称をでつち上げ「革命のために左傾せよ」と云ふスローガンを掲げ

て挑発離間に狂奔した。

共産党による国民党赤化工作を指揮してゐたのは、云ふまでもなく国民党顧問ボロチンであつた。赤化の魔手は黄埔軍官学校にも伸びてきた。ボロチンは先づ、軍官学校学生を切崩し、更に学校も乗つ取らうと企てたのである。当時、軍官学校校長であつた蔣介石は次の如く書いてゐる。

「一九二五年一月二十五日、共産分子は『青年軍人連合会』を結成して軍官学校と各部隊内の両党かけ持ち分子を吸収したばかりでなく、私自身までも共産党に入つたせ云ふデマを飛ばして、軍官学校学生の抱込みに狂奔してゐた。そこで軍官学校の学生と部隊将兵のうち三民主義と国民党に忠誠を誓つてゐる者は、連合会の圧迫にたまりかね、遂に陳誠を中心として『孫文主義学会』を結成し、これに対抗した」（『中国のなかのソ連』）。

国共合作からわづか一年後の一九二五年初頭、共産党は「国民党内工作決議案」なる秘密決議案を全党員に指令した。その要点とは

- ① 国民党各党部を共産党の団体活動機関と認定し、これを通じて、全力を挙げて我が党（共産党）の国民党利用の目的を達成すること。
- ② 国民党左派、即ち親共産派の汪精衛、廖仲愷らに対しては、慎重な態度を以て接触し、追々純粹の共産党員化すること。
- ③ 国内実力派と国民党との提携を打破すること。
- ④ ソ連以外の国家と国民党との間に親善關係が発生するのを妨害せよ。
- ⑤ 国民党員及び一般民衆に暗示を与へて、三民主義を懷疑し、批判するの風を起すこと。
- ⑥ 社会組織の中核に潜入し、社会の現状を破壊すること。
- ⑦ 国民党の労働者生活改良の計画を破壊すること。
- ⑧ 北京その他各地の学生總會に潜入し、これを我が党の活動利用機関とすること。